

## すすんで仕える者になろう

～この人の言うことを何でもしなさい～

（ヨハネ 2:5）

### 目次

#### 序論

#### 1. 耳を傾けることへの呼びかけ／■ヨハネによる福音書 2 章 1－11 節

#### 2. 創造的な信仰への旅

2.1. 時のしるしを受け容れる／2.2. 信仰に根ざして／2.3. 召命の自発性／2.4. 惜しめない奉仕

#### 3. とともに想起しつつ記念すべき次元

#### 結論

---

#### 序論

毎年、発表されるストレンナをとおして、サレジオ家族全体が特定のテーマを掲げて集まり、祈りと黙想をつづけ、傾聴と分かち合いを通して、それぞれのグループのメンバーの召命における霊的で、カリスマ的で、司牧的な歩みを育む機会となります。

聖年の出来事を前提とした 2025 年のストレンナでは「希望に錨を下ろし、若者といっしょに巡礼しよう」という目標を掲げましたが、まさに私たちは教会全体とともに歩み、自分たちの希望の源であり支えでもあるキリストの神秘を観想する機会を授けられました。「決して失望させることのない希望」というテーマを掲げることで、私たちは、御子をとおして私たちを訪れてくださる創造主である神の神秘が、聖霊の力によって今日も私たちを支えつつけていることを深く考えることができました。その意味で昨年のストレンナは、日々の生活における神のしるし、つまり神の愛の神秘を映し出す具体的な現実を理解する助けとなりました。

希望とは、私たちが生き、見つめる「すでにあるもの」への活力であるとともに確かな

あかしです。そして「まだ実現していないもの」への勇気と喜びの源でもあります。

昨年サレジオ会宣教師派遣 150 周年を記念した一連の出来事は、非常に具体的で現実的な機会でした。ドン・ボスコにとって、希望の力がいかに彼の心に勇気を生じさせ、神の計画を発見し、それを実行に移すという断固たる決意を支えたのかを、私たちは再発見できたからです。この出来事を深く読み解くと、希望こそがドン・ボスコの牧者としての心の原動力であったことがわかるでしょう。希望があったからこそ、彼は時のしるしを読み取り、神への信仰に支えられて世界全体の将来を見つめることができました。

こうした歴史的な記念を行ったことで、宣教師派遣の出来事がドン・ボスコの生涯における極めて重要な時期であったことが明らかとなりました。南米への宣教師派遣と並行して、彼はサレジオ会員をフランスにも派遣し、サレジオ協力者会を設立するなど、多忙を極めていました。それゆえ、常に神の御心に心を開き、従うことを重んじていたドン・ボスコにとって、非常に刺激的な時期でした。希望に導かれ、ドン・ボスコは深く信仰に根ざしていました。

ドン・ボスコがトリノに住んでいたのが確かなことならば、彼の心と精神とが全世界に宿っているのもまた、確かなことです。神の計画を発見した彼の希望は確信に満たされました。しかも完全な確信の源となり、恐れをものともせず、ためらうことなく、信仰をもって最後まで従わなければならないという確信までもいだかせました。初期のサレジオ会員たちは、ドン・ボスコの心と精神とを活気づける希望の力を感じ取りました。彼ら自身が後に「信仰の人であるドン・ボスコ、信じる者であり、神と一つになったドン・ボスコ」として理解し、解釈したのは、決して偶然ではありません。2025 年 6 月初旬に開催されたサレジオ家族世界協議会では、様々な議論と考察が重ねられました。協議会は「信仰」というテーマに焦点を当てました。希望の力が信仰にもとづくならば、真に希望に満ちた人間の人生は、御父の御子であり、私たちのために人となり、聖霊の力によって私たちのあいだにいまも生きつづけているイエスとの、より深く、より真摯な信頼関係へと到達します。

それでは、「2026 年のストレンナの解説」で展開されることになるいくつかのアイディアをひとあし先にご紹介しましょう。

## 1. 耳を傾けることへの呼びかけ

「彼がこれから告げることをあなたがたは何でも行いなさい（主に聞き従いましょう）」という呼びかけは、単なる聖書の引用ではなく、真に霊的なものであるとともに牧者とし

での宣言でもあります。この招きであり命令でもある呼びかけは、ヨハネ福音書の前半部分でマリアの口から発せられています。祝賀の瞬間となるはずだったこの状況は、突如として悲惨な結末に急降下するとともに、完全な失敗に陥る危険にさらされています。葡萄酒がないのです。この危機的な困難の状況において、思いやり深い母であるマリアは、給仕たちに、イエスが動く「その時」が来たとしたら、彼がいったい何を告げるかに注意深く耳を傾けるようにと、ただひたすら促します。

以下に掲げる聖書のページを読み返すと、素晴らしい気持ちにさせられます。

### ■ヨハネによる福音書 2 章 1－11 節

1 三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があり、イエスの母もそこにいました。

2 イエスと弟子たちも婚礼に招かれていました。

3 葡萄酒が足りなくなったので、イエスの母はイエスに、「葡萄酒がありません」と言いました。

4 イエスは彼女に答えられました。「婦人よ、私に何の関係があるのでしょうか。私の時はまだ来ていません」。

5 母は給仕たちに、「この人がこれから告げることをあなたがたは何でも行ってください（聞き従ってください）」と言いました。

6 そこには、ユダヤ人の清めの儀式のために、石の水がめが六つありました。それぞれの水がめには 80 リットルか 120 リットル [註；二ないし三メートル] の容量がありました。

7 イエスは彼らに、「水がめに水をいっぱいに満たしなさい」と言われました。そこで彼らは、縁まで水を満たしました。

8 イエスはまた彼らに言われました。「さあ、汲んで世話役のところに行ってきなさい」。彼らは水がめを運びました。

9 世話役は、葡萄酒になった水を味見したが、それがどこから来たのか分からなかった（水を汲んだ給仕たちは知っていたが）。そこで世話役は花婿を呼び、

10 こう言いました。「たいていの人はまず善い葡萄酒を出し、客が飲み終わってから悪い葡萄酒を出すものです。しかし、あなたは善い葡萄酒をいままで取っておかれたのですね」。

11 これは、イエスがガリラヤのカナで行われた最初のしるしであり、イエスは栄光を現

わしました。そして弟子たちはイエスを信じました。

カナの給仕たちに対するマリアの言葉（ヨハネ 2・5）は、聞くことと応答することの教育法を凝縮したものです。それは、あらゆる受動的な服従に反対する教育法です。マリアは単に「聞き従いなさい」と言うのではなく、個人的に、能動的に、そして積極的に「彼があなたがたに告げること」に耳を傾けるよう招きます。これはキリストという人格に対する信頼への招きであり、その信頼は責任ある行為へと変わり、真の自発性を生み出します。

ストレンナの副題である「**信じる者たちよ、自発的に仕えましょう**」という呼びかけは、実存的な軌跡をたどることで、次の図式を完成させます。信仰から自発性が生じ、自発性から奉仕が生まれ、つまり信仰が実践されることによって他者を自発性のある生き方に招くような連鎖する自発性が完成します。このプロセスは時系列的な順序ではなく、それぞれの要素が互いに養い合い、支え合う、生命力に満ちた力学として成り立っています。このプロセスから、いのち、喜び、そして交流が生じます。しかし生じてくることから距離を置き、孤立したままでは、信じる者として生きることができません。信じるということは、賭けに出ることを意味します。自分自身を完全に賭けるのです。信じることは、過去の歴史について単に「コメントする」ことに甘んじる安楽な境地から、私たちを突き動かします。信じることは、より公正な社会を構築する動きを生じさせ、その活動に貢献する経験です。信じることは、より一層成熟した人類へと向かうための成長のプロセスを推進する原動力となります。

## 2. 創造的な信仰への旅

ストレンナの提案は、キリスト者にとっての識別の方法、すなわち「**認識する—解釈する—選択する**」という**一連の流れ**を思い起こさせるものであり、段階をふまえています。この提案は、盲目的に従うような活動主義および地に足のついていないような架空の精神主義という両極端を避ける道です。今回の提案は、私たちが信仰をいだいて、みことばの招きを受け容れるときに私たちの前に開かれる道へと踏み出すための招待です。つまり信頼と責任によって刻まれた道です。つまりサレジオ会の最も優れた伝統を特徴づける道です。若者が信頼をいただくことができるように、誰かから信頼を与えられるように助け、彼らに寄り添い、力強い選択をするよう教育し、「**善きキリスト者、誠実な市民**」を育成することを目指します。

## 2.1. 時のしるしを受け容れる

新しいストレンナに登場する第一のことがらとして、「時のしるしと歴史を受け容れること」の緊急性を深く考える必要があります。私たちが生きてきた歴史には、もちろんまだまだ未解決の課題がたくさんあるわけですが、それにもかかわらず共感をもって「向き合う」必要があります。

この姿勢は、私たちを取り巻く現実に対する積極的な愛のしるしです。教育者であるとともに信仰をいさぐ牧者として、私たちは、出来事を受動的に堪え忍ぶことしかできないような、あの不動の状態に陥ることを拒否します。私たちに求められているのは、霊的な知性をもって課題を「認識する」ことです。これは極めて重要かつ決定的な一歩です。認識とは識別力、つまり何が起きているのかを深く読み取る能力の賜物です。この方法によってのみ、私たちは破滅的で敗北主義的な解釈を避けることができます。教育および司牧に携わる私たちにとって、「神の働きを受け容れ、明らかにする宝箱としての歴史」というイメージは、特に適切で、心に響くと言えるでしょう。宝箱は、人間らしさが私たちの目の前で進歩するときに、注意を払うことによってのみ、神の働きが、たとえ隠れていようとも、おだやかに作用していることに気づけることを示唆しています。神の働きを発見し、把握し、受け容れるためには、信仰のまなざしが必要です。これは、まさに最もサレジオ会らしいアプローチです。ドン・ボスコは、最も複雑な物語を背負い、最も困難な状況において、「神によるおはからい」の働きを把握する方法を知っていました。そして、彼は、一見して障害や困難に映るようなあらゆることがらを、若者の完全な成長と神の国の伝達のための機会に転換することに成功しました。

## 2.2. 信仰に根ざして

新しいストレンナに登場する第二の動きは、キリスト教信仰の経験の核心に直接つながっています。キリストの光に照らされてこの世の出来事を読み解くことは、まさに根源的な選択をすることであり、それは不断の献身の結実としてのみ成熟します。イエス・キリストは信仰の「対象」として捉えられるべきではありません。神の御子であるとともに、人となったイエス・キリストは、私たちにとってロゴス、すなわち現実を理解するための基準なのです。それは聖霊の力によって照らされ、聖と俗のあいだのあらゆる二元論を克服するアプローチです。キリストとのこの健全な関係だけが、人間に備わっている神らし

さを私たちの心と精神とにおいて明らか理解させることができます。このようにして初めて、「私たちが経験する出来事から神の意志がどのように現れるのか」を発見するという呼びかけは、特に重要な意味を持つようになるのです。成熟した信仰のこのアプローチは、神が聖書と教導職を通して語るだけでなく（これは私たちの召命と深く関わっていますが）、私たちの旅路で出会う若者や人々の具体的な物語をとおしても私たちに語りかけてくださることを認識するためのものです。彼らの物語は、神の存在を絶えず明らかにし、また思い起こさせてくれます。

いかに注意深く識別を行ったとしても、確固とした霊的形成が必要であり、その成長の歩みこそが識別の作業を支えます。核心的で不可欠な要素は、みことばとの出会いです。それゆえに、たくましい力強さが生じます。私たちは、みことばとの全人的な接触を通して健全に成長します。みことばによって養われ、啓発されたときにのみ、神の呼びかけは単なる情報ではなく、むしろ霊的な糧となり、日々の旅路の光であることを悟れます。

私たちが真にみことばに耳を傾けつつ従う（ob-audire [オブ（-に向かって）－アウディーレ（聞く）→オッベディーレ；聞き従う＝従順に生きる]）ときに、みことばは私たちに「情報を与える」だけでなく、情報をはるかに超えて人間らしさを「形作り」つつ「変革」することになります。

### 2.3. 召命の自発性

第三番目のことがらとしては、新しいストレンナはキリスト教信仰の自発性という繊細なテーマに触れています。このテーマについて、数多くの混乱が見られる生活環境において、私たちは「自発的な傾聴」を実践する時にのみ、福音の「解放の力」を経験できるようになるのです。強制された傾聴、あるいは恐れや都合によって条件づけられた傾聴は、何の効果ももたらさず、長期的に見れば有害ですらあります。自発的な傾聴とは、神の御心を喜びをもって受け容れることができるような真の経験が実感できるときにこそ、真の解放をもたらします。神の子としての自発性——経験しつつ実践すること——こそが、相手を世話する際に生じうる危険な独りよがりな姿勢を予防させるのです。

こうしたことを、私たちは経験によって理解します。「あらゆる行い」が「みことばによって活かされつつ導かれるとき」にこそ、祈りと行いとのであいがつながり、霊的生活とこの世への献身とのあいだも連続し、すべてが円満にまとまった霊性（統合的な霊性）の輪郭が浮かび上がります。カナでの経験は、私たちに「自分の意見によりかかるような信仰の姿勢、つまり自らの理性によって条件づけられた信仰がもたらす危険」、すなわち「私

の見解では」という、私たちがよく耳にする（そしておそらく口にすることもある）言葉で表現される「私が考えている」という信仰のいだきかたに警戒するよう求めています。私たちの「理性」による要求に屈した状態の信仰の姿勢は危険です。

サレジオ会の生活の文脈では、信仰と理性とは常に同盟関係の姿勢であるとみなされています。それゆえ、両者のバランスを保つことは、繊細な作業であるとともに、避けてとおれない切実な道であるという理解がなされています。

純粋に水平的なアプローチだけで生きようとする危険性は、あらゆることをもっぱら人間的な基準だけで測ろうとする自己中心的な選択から生じています。その結果、信仰、ひいては信仰教育のあらゆる提案は、単なる理性的な提案として矮小化されてしまいます。

ここで私たちが明確にすべきことは、決して理性を軽視することではなく、むしろ理性が唯一の判断基準となることで神秘と恩寵との超越的な次元を覆い隠す事態を防ぐことです。これこそ統合的な教育を目指すためのあらゆる生活環境にとって不可欠な次元です。

#### 2.4. 惜しめない奉仕

ここで新しいストレンナに登場する第四番目のことがら、つまり最後のポイントについて述べましょう。私たちが旅の集大成である奉仕へと導かれることについてです。「**信仰に根ざしつつ自発的になりましょう——奉仕しましょう**」。ここに、旅のすべてが集大成されます。信仰に根ざすことから自発性へ、そして自発性から奉仕へと人生を深めましょう。これらのプロセスは、これまで受けた愛が徐々に成長するような、おのずから湧き起こる表現なのです。

「神の計画に全面的に協力する」という招きは、あらゆる信仰者にとって特別な力ともなって響きわたります。「全面的に」という副詞は、留保のない全体性の重要性を強調しています。これは、信仰者が神の御働きにおける積極的な協力者として自分自身を発見する、あらゆる真の信仰の旅を思い出させる言葉です。

ここから、私たちは「信仰の大胆さ」という表現が備える力量を感じ取ることができます。これは、教皇フランシスコのお気に入りの表現の一つを想起させます。真の信仰とは、決して臆病なものではなく、むしろ勇敢なものであり、神の国のためにリスクを負うことをいとわないものです。真の信仰は、決して自分の力によるものではなく、むしろ神の力に頼ることができることを熟知している人々による大胆さです。カナの旅は、「分かち合う喜び」、つまりサレジオ会のカリスマの際立った象徴によって締めくくられます。そ

れは表面的なものではありませんし、感情的なものでもありませんし、しかも凡庸なものでもありませんし、あるいは馬鹿げたからさわざでもありません。むしろ、真摯な分かち合いから生まれる、心の奥底から湧き上がるほどの深い喜びこそが、自分たちの人生が神の計画の一部となっているのだと実感する経験を強めてくれるのです。

### 3. とともに想起しつつ記念すべき次元

いま、サレジオ協力者会 150 周年について言及することは、祝賀を意識させるにとどまらず、さらに主が私たちに求めつづけておられることに対する応答を計画的に行うことをも意味します。ドン・ボスコの預言的な夢は今日もなお意味をもち、彼自身が伝えた「将来への展望」と、そのカリスマの継承者であり推進者である私たちの現在の責任を想起させます。したがって、150 周年の祝賀は過去の回想であるばかりではなく、むしろ未来への再出発でもあります。

今年は、これまでの恵みの一瞬一瞬を表現し、経験しつづけているサレジオ協力者会による経験を学び、振り返り、感謝し、ともに祝う機会となることでしょう。サレジオ協力者会およびサレジオ家族のあらゆるグループに対する主のおはからいに感謝しつつ、神の霊がドン・ボスコを通して鼓舞したカリスマ的な働きへの理解をますます深めましょう。過去の出来事を振り返ることは、私たちを未来へと駆り立てますので、美しい遺産となります。未来は、私たちをより一層信仰を深める主人公として成長させ、神の国という大義のために価値ある奉仕者となるほどに勇猛果敢な自発性をもたらします。

### 結論

大きな変革を迫られ、たくさんの課題をかかえ、まったく前例のない出来事が生ずる現代において、「2026 年の年間目標」(STRENNA 2026) は、これから始まる一年が、信仰における個々人の成長のみならず、共同体レベルでの司牧経験上の成長のための羅針盤を提供するような霊的な旅となることを目指しています。この意味で、サレジオ家族グループおよび地域社会の一員として、私たちはキリストへの信仰に根ざし、現実の状況に耳を傾けることから始めるよう求められています。こうした姿勢によって、私たちは真の自発性をもって召命を生きます。それは、若者たち、そして希望の「葡萄酒」が足りなくなっているあらゆる人々のために奉仕することを選択をするよう私たちを駆り立てるような自発性です。しかも、私たちが人間として成長することに賛同させるように強く後押しする自発性なのです。



ドン・ボスコは最初から、彼とともに、そして彼と同じように、若者にとって善いことを推進する人々による偉大な運動を「思い描いて」いました。そうです、これが、まさに今日もつづいているドン・ボスコの夢なのです。サレジオ協力者会 150 周年の祝賀を迎えて、いまや私たちひとり一人の心には、今日の課題に直面する若者たちに仕えたい、という強い決意が芽生えています。この決意は、聖母マリアが今日でも私たちに語りかける「**彼がこれから告げることをあなたがたは何でも行いなさい**」というあの言葉に、私たちが忠実に、そして惜しみなく応えていることのあかしなのです。

サレジオ会総長ファビオ・アッタールド (Rector Major, Fr Fabio Attard)

\*\*\*\*\*

2025 年 8 月 8 日（金）阿部仲麻呂訳 [イタリア語と英語を参照しました]

\*\*\*\*\*

サレジオ家族に所属する世界中の指導者、管区長、管区代表の皆様へ

聖母マリアの重要な祝日 [※訳註；8 月 15 日の聖母被昇天の祝い] を迎えるにあたり、総長が「ストレンナ 2026」（年間目標）を発表しました。「**彼がこれから告げることをあなたがたは何でも行いなさい** [主に聞き従いましょう] ——信じる者たちよ、自発的に奉仕しましょう」というものです。

発表の原稿を各言語でお送りします。この「概要」は本日の ANS に掲載されています。

「サレジオ霊性の研修」が 2026 年 1 月 15 日から 18 日までトリノで開催されます。  
2025 年 10 月上旬に招待状をお送りできる予定です。 2025 年 8 月 6 日

心より愛を込めて ジョアン・ルイス・プラヤ神父 (サレジオ家族代表)